

障がいを持つ青年の問題行動の理解とその対処

特定非営利活動法人 ゆめこころ

〒400-0334 山梨県南アルプス市藤田4604-1

助成事業の概要

知的障害や発達障害では、こだわりや自傷、他害、攻撃行動などが思春期以降にエスカレートし、認められるようになってくることが多い。家族も途惑うことが多いが、こうした障がいを持つ子どもと日々接する福祉の現場では、大きな問題となっている。

そこで、今回、福祉の場で働く人々や保護者を対象として、「発達障がいに対する理解」を深めてもらうと同時に、日々の理不尽な行動に対して自分の感情とどのように向き合いコントロールしていけばよいかについて「自分の感情のコントロールを学ぶ」研修の機会を設けた。さらに、思春期以降青年期の知的障害では肥満が問題となってくるが、うまく生活の中にスポーツ等体を動かす機会を取り込むことで、肥満解消、また仲間とのつながりができることで問題行動も少なくなってくると考え、体力づくりについても学んでもらうこととした。

実施時期は平成28年10月1日、8日、15日、平成29年2月18日の4回であった。

参加者の多くは、初めて学ぶ事柄が多く、今後の仕事に活かしていきたいとのことであった。

事業の成果

発達障害を理解するためとして、近年研究が進んでいる社会脳の発達から、その特性について説明がなされた。社会脳に必須の脳領域は前頭葉であり、1) 相手の気持ちや周囲の状況

を把握すること、2) 注意力の持続や精神的努力の集中、3) 衝動的反応の抑制、4) 論理思考や行動計画などにかかわっていることが明らかになってきた。この前頭葉の機能発達により、他者との関わりや将来の自己イメージを広げていくことができる。従って、発達障害を持つ子どもや人にとって、「周囲の人にほめられる」「周囲の人に認められる」「周囲の人に必要とされる」ことが、社会脳を発達させていくことにつながる。

こうした発達障害の子どもや人々の行動の理論的な背景、また具体的な関わり方の示唆を得たことで、迷いながら行ってきた日々の関わりに自信を持てたり、今後の関わりがよりよい方向になっていくことが期待される。同時に、発達障害を持つ人々によりよい環境が提供されていくことになる。

感情のコントロールについては、まず感情がどのようなものであり、自分にとってマイナス名状況に対してどのようなことが起こるのか等を理解した上で、自分の感情を客観的に捉える試みを行った。人との関わりの上でイライラするなど問題と思える場面を、各自で思い出しながら、言葉のやり取り、そのときの表情など振り返って記述することで、何気なくやり過ごしてきた場面を改めて認識し、分析することが可能となる。自分を知る良い機会となっていた。

からだづくり、体力づくりでは、まず運動発達についての説明があり、次いでダウン症の乳幼児期からの運動発達の特徴とその関わり方によって正しい姿勢や動作の獲得につながること

が述べられた。乳幼児期からのよりよい働きかけはもちろんであるが、それ以降であっても適切に働きかけること、十分な運動を促す環境を提供することで改善していく可能性がある。一方で、保護者からは、青年期の問題なども出され、こうした問題を専門家と共有すること、また、的確な知識を提供されたことは、今後のダウン症の乳幼児だけではなく、それ以降の青年等に対する関わりがよりよいものとなっていくことが期待される。

■ 成果の広報・公表

成果は、

- ・ホームページ等で公表していく（すでにFace Bookを通しては公表）
- ・福祉系職員の勉強会等で情報（成果）を共有
- ・親の会の勉強会、会報等で情報（成果）を共有

■ 今後の展開

今回、研修会を開催できたことで、発達障害及び感情のコントロール、青年期の知的障害（ダウン症）を持つ者の生活に対する理解が深まったこと、及びどのように関わっていけばよいかのヒントが得られた。しかし、まだ、今回の内容のみでは不十分であること、参加者からも抗した研修会を継続してほしいとの声があったことから、今後も、定期的に研修会を開催していく。ただし、そのためには予算の問題があり、どのように進めて行けるかは検討していく必要がある。

なお、実際に当事業所だけではなく、県内の多くの事業所の方々と同じ場で研修ができたことで、交流もうまれ、勉強会のような形があっても良いのではないかと考えている。